

古堤街道を往く③ 「農業で栄えた八ヶ所領の村々」

す。

「八ヶ所」の名称は、江戸時代にも北河内西部の村々の総称として存続し、後には「八ヶ庄」とも呼ばれるようになりました。八ヶ庄の村々は、水利などの広域的な問題については連携して対処していました。

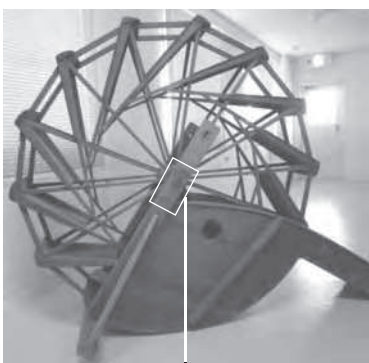
近代に入ってから、旧八ヶ所領では稲作や蓮根栽培などが盛んに行われました。また諸福は、灌漑用の農具であった水車の製造拠点でもあり、一時期は大阪府内の市場で70パーセントの割合を占めていました。

高度成長期以降の都市化によって、旧八ヶ所領の田園風景はすっかり失われてしまいました。今でも古堤街道沿いには、農業用の水路や樋門の跡などが残っており、往時の面影をしのぶことができます。

(生涯学習課)

古堤街道を諸福から住道方面へ進んで行くと、街道の通る場所が北側の土地よりも約2メートル高くなっており、街道が寝屋川の堤防上に築かれた道だったことがよく分かります。街道の北側にある諸福・新田・御領・氷野などの地域は、かつて深野池から新開池の背後に広がる低湿地帯でした。近年の御領遺跡での発掘調査によって、この付近では13〜14世紀頃に集落が形成されたことが明らかにになりました。

室町時代には、諸福・新田・東水野(現大東市)と大和田・島頭・馬伏・岸和田(現門真市)・安田・下(現大阪市鶴見区)の各集落は、京都の北野天満宮の荘園「八ヶ所領」となっていました。八ヶ所領は、淀川と旧大和川に挟まれた軍事・交通の要衝の地であり、領内には「八ヶの湖」と呼ばれた底の浅い池沼があったよう



「諸福」の銘が刻まれた水車
(大東市立歴史民俗資料館所蔵)